想像するちから：チンパンジーが教えてくれた人間の心

松沢哲郎、まつざわてつろう
（京都大学霊長類研究所）

１９７４年３月　京都大学文学部哲学科卒業
１９７６年３月　同大学院修士課程修了
１９７６年１２月　同博士課程中退、霊長類研究所助手
１９８７年、同助教授、理学博士
１９９３年、同教授、現在に到る
２００６年、所長（2012 年まで）
紫綬褒章(2004)、文化功労者（2013）、日本学術会議会員

人間の体が進化の産物であるのと同様に人間の心も進化の産物である。そうであれば、人間の親子関係も子育ても教育も進化の産物である。とはいえ、骨や歯は化石として残るが、親子関係や子育てや心のはたらきは化石としては残らない。そこで、共通祖先から分かれた人間以外の動物の親子関係や子育てや心のはたらきを知ることが重要だ。共通する部分は祖先から受け継いだものであり、違う部分はそれぞれの進化の過程で生み出されたと考えられる。人間にもっとも近縁なチンパンジーを比較対象にして、人間の親子関係や子育てや心のはたらきの進化を考えたい。

まず人間の子育ての特徴は、母親だけでなく複数のおとなが協力して、手のかかる複数の乳幼児を同時に育てることにある。親が子どもの顔を覗き込んであやす、眼と眼があってほほ笑みあう。がらがらを顔の前で振る。イナイイナイバアをする。あかんぼうが声をたてて笑う。生後半年もすると子どもに離乳食を与える。これらは人間を特徴づけるふるまいだ。

そもそも「親が子どもを育てる」のはあたりまえのように思える。しかし、この地球上に生息する数百万種とも数千万種とも呼ばれる生物のありようを眺めてみると、親子関係の基本は「親は子どもを育てない」である。子どもに投資をするようになったのは哺乳類や鳥類の共通祖先があらわれる約 3 億年前からだ。人間を含めたサルの仲間、すなわち霊長類の子育ての特徴は、「子は親にしがみつき、親が子を抱く」ことにある。手があるからだ。四肢の末端でつかむ。4 つの手をもつサル類が、人間の進化の過程で森からサバンナに進出して、長距離を歩くようになって「足」を生み出した。四足動物が直立して手が自由になったのではない。樹上にすむ四手動物が地上に降りて足ができたのである。

人間の親子は「しがみつく・抱く」ではないユニークな親子関係を発達させた。親子が離れている。あかんぼうは仰向けの姿勢で安定している。直立二足歩行ではなく、仰向けの姿勢こそが人間の特徴であり、人間を進化させた。仰向けで、豊かな対面コミュニケーションがあり、声を交わし、手で物を操る。

また、チンパンジーには彼らに特有な直観像記憶のあることが見つかっている。その一方で、人間はそうした能力をもはやもたないが、言語を発達させた。チンパンジーは人間と同様に賢いが、そのあらわれ方が違う。チンパンジーは人間ほどにはまねることがじょうずではない。人間のようにはことばを操れない。

ことばの本質は、自分の経験を他者と分かち合うことだ。自分が見たこと、聞いたこと、考えたことを、他者にことばで伝える。そうした経験と知識の交換によって、自分だけの限られた体験では得られない情報を手にする。そうして互いが互いを必要とし、他者に自発的に手を差し伸べ、お互いが助けあうように人間は進化してきた。「みなで一緒に・・・・する」というのは、きわめて人間らしいふるまいだといえる。

チンパンジーは、つきつめていうと、「今、ここ、わたし」の世界を生きている。それに対して、人間は過去にも将来にも広がった世界で生きている。想像するちから。それによって、遠く離れた過去や未来に思いをめぐらし、遠く離れた場所で苦しむ人々に心を寄せ、ほかのひとたちとのつながりのなかで生きている。チンパンジーとの比較を通じて見えてきた、人間の本性についてお話したい。

主な出版物

松沢哲郎（1990）「チンパンジーから見た世界」、東京大学出版会
松沢哲郎（1995）「チンパンジーはちんぱんじん」、岩波ジュニア文庫
松沢哲郎（2001）「チンパンジーの心、岩波現代文庫」、岩波書店
松沢哲郎（2002）「進化の隣人ヒトとチンパンジー」、岩波新書
松沢哲郎（2006）「おかあさんになったアイ」、講談社学術文庫
松沢哲郎（2011）「想像するちから」、岩波書店

ホームページ

チンパンジー・アイ、http://langint.pri.kyoto-u.ac.jp/ai/index-j.html
森林再生をめざす「緑の回廊」プロジェクト、www.greenpassage.org
霊長類学・ワイルドライフサイエンス、www.wildlife-science.org